

ギャグとヒューマン ~ロザリオなんて飾りじやい！~

スロウ亀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは普通の少年に憑依転生してしまった男の物語。しかしその男の持つ力が問題があつた。

「まあぶっちゃけギャグがあればなんとかなる！」

ロザリオとバンパイアにギャグ補正というチートを持った半オリ主ものです

プロローグ

目

次

1

プロローグ

「すまん、お前さんは死んでしまった。」

「……」

突然真っ白な場所で変な格好した爺さんにそんな事を言われた
一体何を言つているんだこの爺さんは…」

「おい、全部聞こえてるぞ？」

「え、マジ？」

「マジマジ」

おつとこいつは失礼

つていうか心読めるからどつちにしろ同じじやね?
地の分とか一人称するのめんどくさいし

「いきなりメタ発言やめい！」

「良いだろ別に！もう死んだんだから!!」

「まさかの逆ギレッ！」

はいもうとつととはじめようよ

もうこんなやりとり読者は見たくないと思うよ多分

「…はあ。もういい。」

もう諦めてため息をする爺さん

「知つていると思うが、お前さんは本来80歳位で死ぬ筈じやつた。
じゃが手違いでお前さんを死なせてしまった。そこでお前さんには
…」

「要するに二次元に転生して人生謳歌しろっていうんだろ？あつ、こ
れ行き先と特典決めるくじ引きか？よつしや引こうぜ!!」

「つて勝手に進めるな！そして、勝手にくじ引きを引くんじや…」
「よしこれとこれに決定！そしてこれ落とし穴の紐かな？ここで王
道つて奴か……嫌いじやないぜ！という訳でレツツ、ゴー!!」

「あつー待てちょっと!?」

爺さんが何か言おうとしたが、俺は紐を引く
すると足元の床が開き、俺は落下した

「全く、なんて男じやあいつは」

青年が落ちた穴を除きながら呟く神

「人の話…いや神の話も聞かずにいくとは」

神はそう良いながら青年が引いたくじ引きの紙を見た

「『転生』ではなく、『憑依転生』だと言おうとしたのに。さて行き場所は……『ロザリオとバンパイア』か。こりや特典、がしょぼかつたらすぐ死んでしまうぞ。特典の方は……ああこりやまた」

神は一枚目の特典の紙を見た瞬間、もう何かを察したような顔をする

「うん大丈夫じやろ。というか色々めちゃくちやにならなければ良いが……だけど」

「一体誰じや『ギャグ補正』なんてとんでもないの入れたのは

あつもういいかな？もういいよね？

よし、皆さんはじめましてピッヂピチ15歳の青野月音だぜ！あの後、爺さんに転生させられた青年Aである。

えつ？転生したのはお前が勝手にやつた事だつて？細かい事は良いんだよ細かい事はよ!!

さて、親しい者から『つくね』と呼ばれている俺だが実はこう見て高校生になろうとしている。

まさか再び高校生活を送るとは、思わなかつたなあ。いや、厳密に言えばやつと高校生になろうとしているんだが……

えつ？高校受験に失敗したかつて？

いやいや受験自体は問題なかつたよ。受験の後、他校の不良グループ達が押し寄せてきて全員地面に頭を突き刺して【犬神家大量発生】なんて立て看板作つてただけだよ。そしてら高校の試験官の先生から不合格もらつちやつたよ。何がいけなかつたんだろうね？

やつぱり【犬神家大量発生！】じやなくて【犬神家大量発生！】といちじょつとしたアートティivistすれば良かつたのかな。

いやそこじゃないだろつてツッコミが来ると思うがこれにはちゃんととした理由があるんだよ

だつて受けた所、美術で有名な所だつたんだよ。しようがないじやん。あと家から近かつたし

「とまあ長い経緯を地の分で表現したところで父さんがねこばばした高校の資料でも見るか」

俺は鞄から高校のパンフを見る

高校の名は陽海学園。変わつた名の高校だが退屈しなさそうな気がする。

「…なあお前さん」

「はい？」

パンフを読みながら話しかけてくるバスの運転手のおつちゃんに返事をする。

「…君も陽海学園に入學する生徒さんかい？」

「ええ。ちょっと色々あります」

本当に色んな頃があつたよ

様々な不良の犬神家が脳内を駆け巡る

「……だつたら覚悟しておくことだ。陽海学園は恐ろしい学校だぞ」

「へえ……気を付けます」

「……ところで」

「いつまで一輪車でバスと並走するんだ？」

「えつーダメですか!?」

俺は驚いてパンフを読むのをやめ、運転席の窓を開けて見下ろしながら話しているおっちゃんを見る。

そう、今現在進行形で俺はパンフを持ちながら一輪車を爆走している。

「陽海学園って一輪車通学禁止なんですか!?」

「いやそもそも一輪車で通うって考えがおかしいよ?」

「くそつーこのままじゃ『I H C R I N—SYAのRは不敗神話のRだ!』と言えなくなってしまう」

「それはハコスカ限定だよ」

おっちゃんから的確なツッコミを入れられた

俺は悔しさのあまり

「ちくしょーーーー!!上等だ! 我が一輪車マジパエフスI M Pの力見せてやるよおおおおおお!!」

涙を流しながらバスを追い越し、陽海学園があるであろうトンネルを潜る

その際、砂埃と涙が宙を舞いながら

これは妖怪しかいない高校で生活するひとりの人間の
シリアルスがありそうで無さそうだけど気持ち程度は入つていそ
な

結局ギャグで丸く收まりそうな物語である